

バルトン一〇〇回忌 特別講演

バルトンと台湾の水道

齋藤博康

ご紹介にあずかりました齋藤です。本日は日水コ
ンの前社長がこの会場に来ており、その偉いさんの
前で話するのは汗だくなことでございます。この
暑さをもって、関東地方もいよいよ梅雨が明け、真
夏になったような気がします。われわれ水道関係者
の気がかりは、やはり梅雨の後、このように夏は暑
くなければならぬと思います。

今日、八月五日は恒例の「バルトン忌」で、しか
も今年は一〇〇回忌に当たり、大勢お集まりいただ
きました。この機会に「バルトンと台湾の水道」と
いう題でお話することになり大変光栄に存じます。
早速本題に入りたいと思います。

私は、昨年十一月に、中国工程師学会へ呼ばれて、
台湾へ行つて参りました。わが国の土木学会のよう
な所でしようか。そこで日本の水道経営のことにつ
いて話をして参りました。いくつかの分科会に分か
れたのですが、私が属したのは行政院の内政部とい
う、日本の内務省に相当する所でした。その營建
署が主催し、水道事業や学者、研究者の方々が大勢
集まり、そこで話を致しました。

約一週間の滞在で、その間、講演やディスカッシ
ョンをしたりした他、何力所か施設見学をさせても
りました。台湾というのは、九州を多少大きくし
た位の広さですが、感心したのはその水道事業は
統合されて二つしかないのです。台北市の自來水事



業処と、台北市を除いた残りの台湾省全体を給水区域とする台湾省自来水会社の二つの水道事業が水道経営の責任を持っているのです。

今日、台湾はアジアの四小竜、フォードラゴンズの一つと呼ばれ、経済的に急成長し、繁栄している地域です。その台湾が海外、特に日本の水道事情について一生懸命勉強しているのです。私が持参した資料やCD、フィルムは全部コピーして欲しいといわれ、その熱意には感銘を受けました。

飲水思源とバルトン

台湾においてはある年代以上の方の中に、立派な日本語を話す人が大勢おり、そういう方々を交えていろいろなお話を聞くチャンスがあった。その中で感心したのは、台湾水道の基礎は明治時代に、日本の政策、なканずくバルトンの指導によって出来たといつて、彼らが今も大変熱い思いを持っていることでした。

バルトンが台湾に滞在したのは、明治二十九年八月から明治三十二年六月までの三年足らずです。この間バルトンは台湾の人たちのために、交通機関も

十分でない、当時は鉄道も北部に多少あったぐらいで、道路も未整備というような辺鄙な所を、水源適地を求めて山野を歩き回ったり、水道計画を作るために現地調査に没頭し、悪疫島とか瘴癘（しょうれい）の地と恐れられた不健康なこの地で、文字通り骨身を削る献身的な努力をしたと聞きました。バルトンの働きは今日においても大勢の台湾の人に感動を与えております。

中国の有名な格言に、「飲水思源」という言葉があります。これは、人は、水を飲むとき、その施設を作った人、井戸を掘った人の恩を忘れてはならないという教訓を表現したものです。現に、彼らはバルトンに対して、今日でもそう言っており、各地の水道施設に多くその石碑を見ることが出来ます。

バルトンの銅像

このようなバルトンの功績を讃えるために、バルトンの銅像が有志によって大正八年三月に建てられました。その銅像は、今日ではもう見ることは出来ません。銅像は太平洋戦争が激しくなった時に金属回収の命令を受けて供出したと言われ、その後はし

ばらく台座だけが残っていましたが、その台座も今は取り壊されてしまいました。

バルトンの銅像は今では写真でしか見ることは出来ませんが、稲場紀久雄さんの「都市の医師」などに出てきます。それが何処に建てられたのか、はじめはよく分からなかったのですが、私は一日かかって探し、その場所を確認することができました。

それは、台北市内に公館浄水場と呼ばれる、施設能力、日量約五十万立方メートルという一番古い大きな浄水場があります。その浄水場の今はもう使われていないポンプ場の前庭にあった。それは、台北市自來水の人に聞けば思い出してくれる人もいたと思われませんが、何分にも古い話で、資料その他もごく限られているから分かりませんでした。

市政資料館でもらった資料によると「台北市水源」とあり、その場所は現在中正区思源路一号となっており、地図で見ながらタクシーで探しました。探してゆくとその所、番地は公館浄水場しかない。公館浄水場の古いポンプ所の写真を見ると、銅像の背景とよく似ていることが分かった。そこで、バル

写真1 劉銘伝とバルトンの像



トンの銅像の写真と重ねてみたのです。公館浄水場の中にあるポンプ所の建物はクラシックな建物で、ルネッサンス式の柱列が沢山並んだ立派なものです。台湾総督府の日本人技師（野村一郎）が設計したそうです。

これを重ねたとき、古ぼけた銅像の写真と私の撮った写真は間違いなく一致しました。実は、この五月、別の用向きがあつて台北に出かけ、その場所に立ったときまさしくここだと確認することができました。

呉論文とバルトン

台湾には、中華民国自來水協会という、日本で言う日本水道協会に相当する団体がありますが、そこに江慶泉さんという秘書長、日本で言えば専務理事に相当する方がおいでになります。私が台湾の工程師学会から帰った後で沢山の資料を送ってくれました。その資料の中に、呉建民さんという方の論文が入っていました。

呉建民さんは、台湾行政院の經濟部（省）水資源統一企画委員会（局）の主任（局長）をされている

方です。この方が書いた約五十ページほどの論文です。その論文のタイトルは、「飲水思源・・台湾水道の先駆者、バルトン」という表題で書かれておりました。

これは、台湾サイドから見たバルトンの働きを記録した大変貴重な資料です。台湾語（省略のない漢字）で書いてありましたから、それを訳して読みました。呉さんに、「訳すのに骨を折っている」と言いましたら、「私は日本語ができるから、日本語に書き直してあげてもいいよ」と仰言いました。折角のご厚意でしたがお手数を掛けずに翻訳することができました。

呉建民さんとはこの五月、台湾へ行った時にお会いしてさらに、お話しを聞くことができましたが、水資源関係の専門家であり、台湾大学でも教鞭（きょうべん）を執っておられる方です。呉さんはその論文の中で、

「バルトンが台湾の人々に対して抱いた人道上の思いと敬愛の情が、わずか三年という短い滞在であったけれども、彼をしてこの不健康な地として恐れら

れた台湾で調査、活動を続けさせ、同地における今日の公衆衛生の基礎を築いた」と回顧しております。

台湾水道創設百周年

来年、一九九九年（平成十一年）四月は、バルトンが指導して完成させた台湾における近代水道第一号が、ちょうど創設百周年に当たります。その第一号というのは、台湾北部の港湾都市、淡水街というところにあります。台北の北西部で、二十キロメートルほどのところですが、ここに近代水道ができて来年はちょうど四月一日で百周年になるというのです。

台湾の水道関係者はバルトンが作ったこの淡水水道の百周年をお祝いしたいと言っております。日本人も、バルトンという水道、公衆衛生の恩人を持っている、台湾の人も共通の恩人を持っているという意味で、百周年をここでお祝いすることは、われわれとしては大変嬉しいことです。

東京水道はこの十二月でちょうど百周年になります。東京水道は日本で最初の横浜水道から数えて五

番目に当たりますが、来年の一月には広島水道が通水し、これが六番目、四月に、淡水ができるのと七番目になります。

このように、今から百年前は、日本によく近代水道が主要都市を中心に布設され始めた時代です。日本の植民地経営が始まった台湾においても、ほぼこの時期から近代水道が通水を開始しました。植民地経営下の台湾が、その始めのころに、日本政府の指導のもとに、一生懸命に水道布設に努力し、都市計画を進め、下水を整備し、公衆衛生に努力をしたということは、人間生活に最も基本的な社会基盤施設である上下水道の整備、公衆衛生の改善には、国も国境もないという考えであったと回顧することができます。

台湾は、もともと中国の領土ですが、当時は清国が統治していました。明治二七、二八年の日清戦争の結果、清国側全権、李鴻章、日本側全権、伊藤博文、この二人が下関で条約を結び、戦争終結・講和条件として台湾が日本に割譲されました。

日清戦争の講和条約において、台湾の他、遼東半島の日本への割譲があります。遼東半島とは、今の中国の北東部の黄海にせり出した半島です。そこをフランス、ドイツ、ロシアの三国が「日本は清国に返せ」と干渉してきたため、日本は止むえずこれを返還しました。

折角の講和条約で日清両国が決めたものを、なぜ返還したかと言うと、日清戦争の直後で、国力は疲弊し、日本には列強を押し返す軍事力はもう残っていなかったといわれます。そして、台湾だけが日本に帰属する新しい領土になったのです。

政府レベルでは台湾を日本へ譲ると合意しても、台湾に住む人たちがこれを了解したわけではありません。当然のことです。日本への割譲を受け入れずに頑強に抵抗する勢力が各地にありました。ゲリラの反乱とか、独立運動が起こった。日本はそのためにまず台湾に何をしたかというと、占領軍を台湾に派遣して、武力で台湾を鎮圧、占領しました。

清国、その前の明国にしても、中国はいずれの王朝も台湾に対しては、中央部から遠く離れていると

いうこともあつて、これを「毛外の地」と呼んで、その経営にあまり熱心ではありませんでした。亜熱帯で非常に暑い所で、衛生状態も悪かった。そのような未開発の文化の遅れた島を日本は譲り受けた。これを日本は国土の一部として経営していくことになつたのです。

バルトン来日

お手元に年表があります。バルトンの動向をを中心に思い付くままに歴史的事実が書いてみました。ミスもあろうかと思いますが、ご容赦願います。「一八五六年（安政三年）、ウイリアム・キニモンド・バルトン、スコットランドに生まれる」と書いてあります。バルトンはスコットランドで生まれ、その翌年の一八五七年に、後藤新平が生まれています。二人はほぼ同じ年格好で、後年、日本で、また、台湾において協力することになります。

バルトンはスコットランドのエディンバラで生まれて、カレッジスクールを卒業したあと、水力機械技師として、また衛生工事会社とか衛生保護協会の技術者として働いたといわれます。明治二十年に、

日本政府の招きによって来日し、帝国大学工科大学に新しく開設された衛生工学の講座の雇講師になりました。来日の経緯については、いま谷口尚弘さんからご説明があつたとおりです。

バルトンの雇講師としての契約は三年間でした。それは明治二十三年五月二十五日に終了しましたが、その後、二回更新、延長されて、三回目の契約の終了は明治二十九年五月二十五日です。契約終了日はまだ、大学の学期中だったので、彼は二十日程延長を受けたようです。この九年間彼は、工科大学の講師として教鞭を執りました。

バルトンは、工科大学で学生に対して衛生工学を教えたほか、内務省の顧問工師（技師）として、全国各都市の上下水道の計画、設計などの指導、助言をしました。それというのは、内務省は明治二十二年九月、各府県に対して大臣依命訓令を出して、「将来起工する上下水道の設計については、あらかじめ当省に計画を差し出すべし」と通達したからです。各都市とも水道計画の立案は未経験ということもあつて、バルトンは計画段階から具体的指導を行った

のです。日本滞在の九年間、バルトンは内務省顧問工師として多くの都市の上下水道の指導、計画に関わりました。

バルトン台湾へ

明治二十九年、内務省衛生局長だった後藤新平はバルトンがたまたま九年間の帝国大学工科大学の講師としての任期が切れたのを機会に、台湾総督府の衛生顧問として渡台してほしいと要請しました。後藤新平はバルトンとは、東京市区改正委員会などで顔を合わせ、その能力について十分知り、お互いに尊敬しておりました。そのようなこともあって、バルトンに台湾水道の調査、計画に協力を頼んだのです。

明治二十九年というと、その前年、日清戦争の講和条約によって台湾が日本に帰属し、植民地経営が始まったばかりです。経営とはいっても、反乱の鎮圧などが忙しく、最初のころの軍人総督はそのため大きな力を費やすことを余儀なくされました。このような中で、総督府がまず手を着けたことは、鉄道、港湾、道路、産業基盤、教育、農業、衛生など、

社会のあらゆる基礎基盤の建設でありました。近代的な台湾の建設、経営をスタートさせるに当たって、必要なことが始まりました。

総督府は、水道の建設、整備に取りかかりました。たまたま、北部の港湾都市淡水街でE・ハンソンというデンマーク人が電信工事に従事しており、彼の技術、科学的知識を活用して、水道施設を造るためのガイドラインを作るよう要請しました。ガイドラインが完成し、総督府はこれを了承しました。しかし、その後、ガイドラインを作ったハンソンの経歴を調べたところ、この人は公衆衛生の専門家ではないということが分かって、水道布設のマニュアルであるガイドラインを見直すことのできる技術者を探しました。このことが内務省衛生局長の後藤新平の耳に入り、後藤は、これが出るのはバルトン以外にないと考えました。

後藤は、内務省衛生局長の要職にあり、わが国における上下水道、医療、薬事、公衆衛生などの責任者です。彼は、台湾総督府の衛生顧問もしていました。後藤はバルトンが任期を終え、スコットランド

への帰国を希望していたところを口説いて、台湾でもう一働きて欲しいと頼みました。後藤の強い要請を受け入れ、バルトンは明治二十九年八月、渡台しました。

バルトンは、渡台に当たり、信頼する教え子、浜野弥四郎を帯同しました。浜野は、明治二十六年に工科大学に入り、三年間の大学生活を終わって、明治二十九年七月に工科大学を卒業した。ちょうど就職のことを考えるタイミングにあつたのです。バルトンの渡台が引き金になつたかもしれません。台湾総督府の試験を受け、土木技師として台湾総督府に勤めるために台湾へ行くことになり、早速、浜野はバルトンの通訳兼助手として同行することになつたのです。

淡水水道：近代水道第一号

地図で見ると、台湾北西部に淡水という小さな町があります。基隆と同様、港湾都市で台湾の北の玄関口です。淡水河の河口に面し、すぐ後に山が迫っています。大きな船は入れませんが、ここにはまず水道を作ろうという計画が持ち上がったのです。外国

人も大勢住んでおり、日本からの軍隊も出入りするといふようなこともあつて、早急に水道布設が求められた。日本で言えば、規模は違いますが、函館、長崎といった感じの港町です。

ここは町の後背地の急峻な丘陵にきれいな湧水の出る水源地があり、しかも原水は豊富にあつたので、浄水場は作らず、そこからの水を自然流下で市街に配水したのが水道の始まりです。私はそこを訪れる前は、そんなものが近代水道と言えるかという気がしたのですが、立派に近代水道の条件に当てはまっています。

バルトンはこの淡水の水道計画を検討したとき、水源地は四か所あつて、二か所ずつ少し離れた高地にあつた。そのうちのどれに水源としての主力を置くかを検討した結果、双峻頭という地名の水源地を主水源にして、あと一つを補助水源にし、そこから取水しようと考えました。原水取水口と配水地の位置を当初計画から変更し、当初の計画にあつた木管の配水管を鑄鉄管に変更し、管径の太いものを採用するという計画変更を加えて計画が決まり、工事が

開始されました。

工事が完成し、通水を開始したのが明治三十二年四月一日、つまり一八九九年のことです。当時の鍍鉄管や弁類が掘り起こされ、水源地内に陳列されているのを今日見ることが出来ます。間違いなく西暦一八九九年に使用されたという曲り管や弁類が水源地の中庭に並べられており、それを見る見学者は百年の時間の流れに感慨無量なものがありません。

水源水質はよかったですので、湧水をそのまま濾過（ろか）せずに配ってりましたが、水質が悪化した時のため、塩素注入設備を作りました。

案内してくれた方がおりまして、現地を訪れたとき、湧水口の上部に「淡水水源」と書いてあるのを確認しました。淡水という地名は、実は一〇〇年前は使われておらず、「滬尾（コピ）水源」と呼んでいたそうです。その標識もありました。

水源地の入口には記念碑があり、素朴な表現ながら、「ここが台湾水道の始まり」とありました。

バルトンはこのようにして台湾の水道第一号の創設に参加する栄誉を担ったのです。

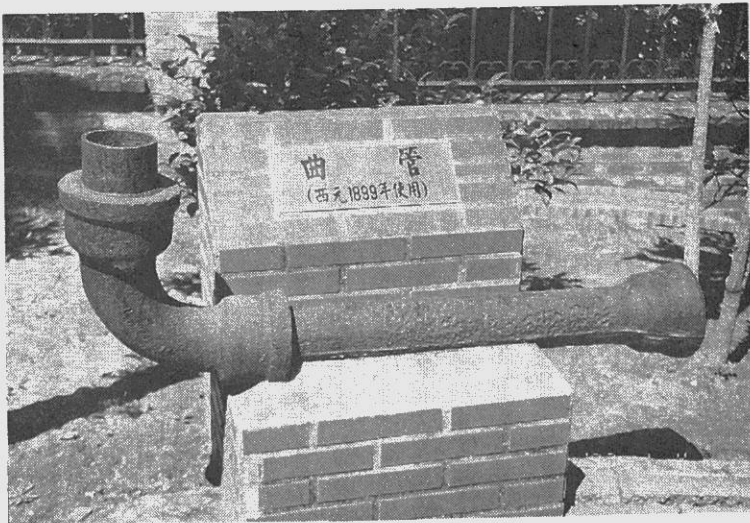
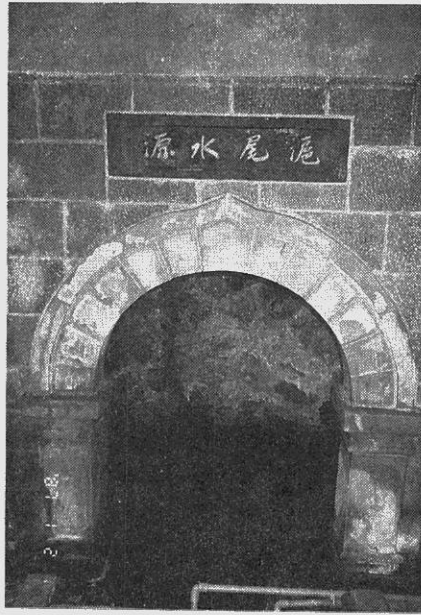


写真2 淡水水源に陳列された管類

写真3 淡水(滬尾)水源



基隆水道

第二番目の水道は、淡水から少し東に所在する基隆市です。基隆は、日本が台湾を占領するために軍隊を派遣したとき、この辺の海岸線に展開して上陸したと言われている港町です。神戸との間に定期航路も開設されておりました。

基隆は、一年中毎日雨が降るといわれる程、雨の多い町です。基隆鉄道駅の前には蒋介石總統の銅像が建っていますが、銅像は雨合羽を着せられています。

この基隆も、バルトンは非常に骨を折って水道を造りました。もちろん、設計とか水源地の位置を決めるといった部分をやったわけですが、基隆の水道ができたのは明治三十五年です。明治三十五年にはバルトンはもうこの世にはおりません。そういう意味で、バルトンは水道の重要な部分、計画の最初の段階で貢献しているのです。

基隆という町は、やはり後背地に山深い所があり、将来の水需要に対する水源をどう確保するかということが大きな問題でした。雨が多いと言っても、ダ

ムを造らないと多分将来の都市の発展には追い付かないだろうとバルトンは考え、ダムを造ることになったといえます。バルトンが計画したダムは重力式コンクリートダムで、このダムは台湾では初めてだったそうです。

バルトンが台湾に来る前に、日本国内の各所に水道を計画しましたが、彼は神戸の布引五本松ダムという重力式コンクリートダムの設計に協力しました。この重力式コンクリートダムは日本、ひいては東洋では初めてのもので、そのダムを設計するに当たってバルトンは、いわゆるランキンの公式の勉強をし、その公式に沿って設計したと言われています。

バルトンが布引ダムの設計をしようとした時に、フランスで重力式ダム（ブージー・ダム）の崩壊という大事故（明治二十八年）があつて、一〇〇人以上の大勢の人が死んだといわれます。こういうニュースをバルトンは極東においてよく知ることが出来たと思いますが、彼はそういうことも研究し、ダムの力学的な構造の勉強もし、巨大構造物の安全性について公式に叶ったものを造つたと言われております。

バルトンが基隆水道のために計画したダムを暖暖ダムと呼びますが、ダムそのものは極めて小さいものです。ダムのそばまで行つて来ましたが、立ち入り厳しく規制されているためいい写真は撮れませんでした。都市に近いため水源環境を守るため、一般人の立ち入りは許さないので。ダムサイトに基隆水源保全碑と書いた大きな石碑がありそれが市民への協力要請の決意を表しているようでした。

台北水道

次に、台湾第一の大都市、台北市に水道が引かれたのは明治四一年で、台湾では三番目になります。郊外に安定した水源を求め、バルトンは、調査のために山野を駆け巡つたといわれます。その途上、彼はマリアアにかかったといわれます。

先程、台北市の一番古い浄水場は公館浄水場だと申し上げましたが、公館浄水場の水源は南の郊外の新店溪から水源を得ているのです。新店溪の水源から導水して、今日、日量五十万立方メートル施設能力を持つ浄水場ですから可成りの水量を必要としていることが分かります。そういうった将来の発展を見

込んだ水源調査のために彼は若い浜野を連れて、山野を駆け巡ったといわれます。そういう折りに、恐らく病気にかかったのだらうと思われれます。

発病して、明治三十二年の早い時期に、台北病院に入院し、その時は幸いに治癒して、関係者と快気祝いをするほどでした。しかし、病気は完全には治つてなかつたと考えられます。

この他、台南、台中、高雄といったいくつかの都市についてバルトンは調査、計画に関与しました。都市の水道：水道の教科書

バルトンが、明治二十年から二十九年までの九年間、日本国内において工科大学の先生として、若い学生の指導、教育に当り、彼の学者としての業績は、そういう教育を通して、これから勃興する日本の衛生工学の分野に大勢の学者、技術者を養成したことにあります。彼がそのために使ったのが、「都市の水道」という教科書です。

「都市の水道」という教科書は、彼が明治二十七年九月にロンドンで出版しました。多分、彼が来日した時は、どういう構想で衛生工学の中身を学生に

教えるかということをおかれこれ考えていたと思えます。当時、その分野の教科書があつたとは思われませんし、彼は自分の経験やさまざまな論文、参考書を使いながら講義案を徐々に作つていったと思われれます。毎年使うレジュメを書き足し、書き足し、推敲（すいこう）を重ねながら水道の分野全体についての教科書を完成させていったと思われれます。

「都市の水道」という本の目次がお手元の資料の中にあります。構成は第一章、第二十二章から成り、これを見ると、今日の水道の教科書の構成とは可成り違うことが分かります。水道計画、給水装置、消費者との契約の関係、修繕、料金、そういう部分はこの章立ての中には載っていない。関連するところで、若干触れてはいるものの、このような重要な章立てが省略されている。それは、当時、類書が見当たらないので、止む得ないことだつたと思います。

翌一八九五年に、ターナー、ブライトモアという人たちが書いた、「水道工学の原理」という有名な参考書が出版されていますが、バルトンとしては、参考にしうがなかつたと思われれます。

本作りというのは大変苦勞の多い仕事といわれ
ます。大学の教授としての仕事の他、各都市の水道計
画の相談とか指導に飛び回る間を使って、原稿をま
とめるのは大変なことだったと思います。しかも、
明治二十七年九月に初版を出したあと、明治三十
一年には改訂版をロンドンで出しているのです。彼
のどこにそういうエネルギーがあつたかと思われ
る位です。

後藤新平

バルトンを語る時に忘れることのできない人とし
て後藤新平がいます。後藤新平は、内務省の衛生局
長をやつたあと、台湾の内政長官をしました。台湾
経営の事実上の責任者といわれています。児玉源太
郎という軍人総督がいましたけれども、児玉は内政
の全部を後藤に任せましたから、事実上台湾の植民
地政策を取り仕切つていたのは後藤新平です。

後藤は明治三十八年、日露戦争が終わつてから今
度は満州の経営を要請されます。満鉄總裁への就任
を頼まれた時、彼はまだ台湾が終わつていないと固
辞するのですが、許されず、満鉄總裁として満州へ

渡りました。鉄道を造るということは、都市を造り、
道路を造り、産業を興し、教育を普及するという、
新しい国作りのあらゆることをやつたといわれます。
その後、東京市長になり、内務大臣をやつたりしま
した。

後藤は非常に気性の激しい人で、仕事もしたが、
敵も沢山作つたといわれます。「大風呂敷」とか、
「内務省のはみだしもの」など毀譽褒貶の相半ばす
る人物です。しかし、先見性に優れ、頭も良く、彼
は部下をその能力で見て、依怙鼻肩しなかつた。内
容や考え方が優れていると、若くても重用するとい
うところがあつたそうです。後藤は、明治二十五年、
留学先のドイツから呼び戻されて、長与専齋の後を
継ぎ、内務省の衛生局長になりました。わが国の衛
生行政近代化の基礎を確立した人物とすることがで
きます。

彼の強引とも思われる実行力と科学的思考、彼の
頭脳の中はいわゆる昔風のものと考え方ではなくて、
近代的、科学的な思考が詰まつていたといわれます。
後藤は、仙台藩の支藩である水沢の出身です。戊

辰戦争で日本中が二手に分かれて争ったとき、官軍に非ざる東北の雄藩はみな賊軍にされました。そして、新政府ができてからは、薩長土肥の官軍に付いた人たちが新政府の要衝のポストを占めて、賊軍だった人たちはもう出る幕がなかった。

賊軍とされた水沢藩の後藤家は零落しましたが、彼は幼時から優秀で、県庁で給仕が必要となり、水沢藩から五人の子供を出せといわれた時、彼は選ばれて、県庁に出仕しました。そのことが契機となり、後藤は医学校を経て、行政官の道を進みます。

彼が台湾経営を立派にやり遂げ、満鉄総裁や東京市長になったりしたことは、薩長土肥から成る新政府の古い頭の人たちでは、日本が近代化して行く上で十分でないことを体制側は承知していたのです。優れた人材であれば、旧賊軍の育ちの人でも富国強兵の時代ですからこれを使わざるを得なかった。そういう意味では、後藤新平はそういう中であつて、その力量が買われて、重要な仕事を次々にこなしていったのです。実に、波瀾万丈の人生だと思われま

伯楽という言葉があります。良馬を見つけることのできる博労のことをいうのですが、私は人を見る目において、後藤は名伯楽だつたと思います。バルトンを発見し、バルトンを台湾に送り出したのは後藤でした。その他、彼が見出した中に挙げられる人として、新渡戸稲造がいます。新渡戸稲造は札幌農学校の先生をしていた。病氣になつてアメリカで療養していたのです。そこへ、農業が分かり経済が分かる人がいないかということで台湾総督府が人を探していた時、新渡戸の話が後藤の耳に入った。

すると、後藤は新渡戸を引っ張つて来た。自分をアメリカに病氣療養に出してくれた農学校に帰らなければいけないと固辞する新渡戸を、東京へ着いたら早速口説いて、台湾へ連れていってしまった。そして、台湾で殖産局長というポストに就けた。彼は後藤の期待に応えて、台湾の風土に最適のサトウキビとか米の生産を奨励しました。

台湾経営は、そういう地道な努力が効奏して、明治三十九年ごろには財政的に自主独立し、日本本国から財政補助金をもらわなくてもやっていけるよう

になった。その他、下村海南、前田多門、浜口雄幸、
こういう後年第一級の人たちが後藤新平によつて見
出され、活躍したと言われています。

後藤新平と日本の水道

バルトンから後藤新平に話が移つてしまいました
が、バルトンを見出した後藤新平に対する評価とは
裏腹に、日本人の持つている後藤観は必ずしもよろ
しくない。そこには可成り誤解があるようです。

後藤の波乱に富んだ人生について紹介しましょう。
彼は十二才の時、給仕として県庁に出仕しましたが
彼が仕えた上司は安場保和という熊本出身の人で、
この出会いが彼の人生を変えた。安場は後藤の才能
を見抜き、医学校での正規の勉強を勧め、愛知県令
のとき、後藤を県立病院へ呼びます。その時、岐阜
で自由党総裁の板垣退助が演説中に暴漢に襲われて
重傷を負った。呼ばれて治療したのが後藤で、後藤
は後に、政友会総裁の板垣と肝胆相照らす仲になる
のです。

名古屋の病院にいた時に後藤は、「健康警察医官
設置の建白書」を書いて愛知県令の安場に出し、そ

こに書かれた近代衛生行政の基本となる保健所行政
のあり方が、県庁を通じて内務省に届けられます。
それが内務省衛生局長の長与専斎の目に留まるので
す。長与に誘われ、後藤は内務省衛生局に移ります。
長与は非常に気性の激しい人で、後藤も筋の通らな
いことは上司といえども主張し、曲げなかったと言
われます。後藤は明治十六年衛生局に移り、その後、
東京市の市区改正、給水条例の制定、バルトンの来
日、横浜水道の創設などが国水道の重要な案件に
関わりを持ったのです。

後藤は衛生局長の時、ある事件に連座して、監獄
に入れられますが、無罪になると、彼の能力を惜し
む声が上がリ、再び衛生局長に復帰し、さらに児玉
源太郎が明治三十一年に台湾総督に就任すると、児
玉に乞われて台湾に行きます。

このようにして、後藤は、彼の能力を知る人によ
つて新しい仕事に就き、運命を切り開いて行きます。
台湾に行く、台湾が自力で産業発展、財政的自立
をするよう努力します。後藤は財源として台湾公債、
つまり外債を発行して、それによつて道路を造り、

鉄道を造り、水道の設備を造つたりということをやろうとしたのです。

ところが、帝国議会において政党間の争いが絶えず、政争の具にされ、公債発行も規模縮小の憂き目を見てしまいます。淡水、基隆水道が出来て、中心都市台北市の水道が明治四十一年に遅れてしまったのもそのような理由があつたからです。

バルトンの死

バルトンは明治三十二年に台湾の三年間の期間が終わり、彼は六十日間の休暇をもらい、家族を連れてスコットランドへ帰ろうと計画しました。台湾での病氣も治つたからといって、東京經由でスコットランドへ行こうという矢先に発病し、東京大学の病院に入院し、急逝します。

バルトンの日本滞在の十二年間に彼が日本と台湾に残したものは、非常に多くの、しかも非常に大事なものを残したと思います。それは、大勢の教え子を教育し、多くの都市において、水道計画、設計を残したことです。彼にしてみれば、日本でやったことも台湾でやったことも同じだと思ふのです。

台湾の人たちは、バルトンのことを非常に高く評価しています。私のささやかな願ひは、バルトンが日本政府の計画によつて、来台した経緯をもう少し、言つてくれると有難いと思います。台湾の今日の経済的發展とか社会的な安定とかは、やはり一番大事な社会基盤施設としての部分がきちんとできていたということだと思ひます。

バルトンとその人脈

浜野弥四郎

バルトンは、台湾に浜野弥四郎を連れて行きました。浜野は、バルトンが日本へ帰つてからも、通算で二十三年間台湾に留まりました。彼は水道の仕事をその後ずっと続け、バルトンの意思とか教えをよく引き継ぎました。バルトンの遺訓は浜野に受け継がれ、浜野はそれを後輩に受け継いでいます。今日は、浜野の下にいた二人の名前を挙げて終わりにしたいと思います。

高橋甚也

一人は高橋甚也氏です。この方は、資料にも書いてありますが、しばらく経つて、東京市へ戻り、水

道局長になった。たまたま戻ってきた時が関東大震災の時で、関東大震災の被害から立ち直るために内務大臣だった後藤新平は東京市に特別な配慮をしたといわれます。

八田与一

もう一人は、八田与一氏です。資料にもあります。高橋と八田は机を並べて浜野弥四郎の下にいた。ある時仕事が変わりになって、農業灌漑水路の計画を八田が受け持つことになった。八田は、台南郊外の烏山頭（うざんとう）という所にダムを造り、それによって嘉南平野の農業生産を拡大するという計画のために、没頭した。ダムが出来、灌漑水路が出来た結果、農業生産は飛躍的に増大したといわれます。

八田は、昭和十七年に農業調査のためフィリピンに向かうのですが、途中で米軍の攻撃を受けて、輸送船とともに沈んでしまいます。さらに不幸は続き、昭和二十年九月には八田の奥さんが、八田が造ったダムに投身自殺をしたのです。

台湾の農民たちは、八田が造ったダムが自分たち

の農業生産のために非常に役に立っていること知っていますから、悲しんでお墓を作り、八田の銅像を作って偲ぶのです。命日は五月八日。その日には毎年墓前祭が行われ、大勢の農民が八田夫妻を偲びます。

この五月八日に、私は墓前祭に参列しました。大勢の人が来ておりました。今日、台湾には、バルトンの銅像も浜野弥四郎の銅像も残っておりません。ところが、八田与一の銅像は今もあるのです。しかも、その銅像は変わっている。銅像というと普通、馬に乗って、髭を生やして、直立して辺りを睥睨（へいげい）するような銅像が多いのですが、八田の銅像はそういうものとは正反対です。一目見れば忘れないような、座像です。膝に肘をつけて考えことでもしているようなポーズです。

周りには花が植えてあつて、公園になっています。八田の郷里は金沢にあるのですが、日本からも大勢の人が出掛けました。八田与一の長男の八田晃男さんは高齢のため来年は参加できないかも知れないと言っておりました。

こんな風にバルトンの足跡（そくせき）を辿って
いきますと、大勢の人の関わり合い分かります。来
年は台湾でも盛大な水道百周年が行われることと思
いますが、日本と台湾はバルトンという共通の恩人
を持つことができ大変有難いと思います。皆さん
方がバルトンのことを考える一助として、お話しし
上げました。ご静聴有難うございました。

（拍手）



写真4 烏山頭ダム・八田与一像と墓